

ノーベル賞を与えられました。産業連関分析は、各産業（実際には各産業部門）が他のあらゆる産業と売買するものを一つの大きな表で示しています。この産業連関表をつくれれば、自動車（あるいは兵器）の生産の増大が、他のすべての産業の売上高に及ぼす影響が計算できるようになるのです。この考えは、遠く離れてこそいられるけれども、直接ドクター・ケネーに由来するものだったわけです。

スミスが訪れたもう一人の重農主義者は、アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーでした。テュルゴーは、その同僚たちとともに、つまるところ企業にたいする、あるいは重農主義者によると農業とその「純生産」にたいする課税負担となる公共支出は最小限に押えるべきだと信じていました。そして、これは国家の権力と機能を制限することによって行うべきだと考えたのです。一七七四年にフランスの財務総監となったテュルゴーの課題は、フランス宮廷の濫費を切りつめ、それによって「純生産」への負担を軽くすることでした。

彼はそれに失敗しました。根強い慣習が、彼の意図にさからったのです。特権的な地位にある人びとは、たとえ破滅するという危険をおかしても、つねにその物質的利益をいささかなりとも譲り渡すまいとするのです。知的近視眼は往々にして愚かさと呼ばれますが、これが理由の一つであることは疑いありません。それでも、特権階級は、他人にはどれほど無法と見えようと、その特権が厳粛にして基本的な神与の権利だと感じています。不正にたいして貧乏人がどう感じていられるかということなど、金持の自分の権利にたいする確信とくらべたらとるに足らない問題にすぎません。革命以前のフランスではそうでした。こうして、上からの改革が不可能になった

とき、下からの革命が避けられないものとなったのです。

### 諸国民の言

テュルゴーが罷免されるよりずっと以前に、スミスは旅行によって多くを学び、スコットランドに帰っていました。彼は大著にとりかかりましたが、友人たちはそれが書き上げられるかどうかを危ぶみました。彼は、いつまでも近刊予定の本と取り組み（かつ執筆のむずかしさと学問的水準の高さを語りながら）結局はその本を出版しないという、今日でも一流大学の名物となっているかの有名な学者の仲間の一人ではないかと思われたのです。

しかし、やっと一七七六年に、彼はその本を出版しました。本は当初から絶賛を博し、「諸国民の富の性質と原因についての研究」の第一版は六カ月で売り切れたわけですが、その初版部数がわかっていたらもっと興味深かったことでしょう。本にもりこまれて多くの情報を通じ、またときにはそこに埋もれたかたちで、オクスフォードの教授たちを観察することによって生まれたと言ってもよいあの偉大な思想がくりひろげられていました。国民の富は、個々の市民が自分の利益をひたむきに追求することによって、つまりその結果としての報酬を受け、あるいはそのためのどんな罰にも甘んじるときに、もたらされる。自身の利益をはかろうとして個人は公共の利益に貢献するというのです。スミスの最も卓抜な言葉によれば、人はあたかも見えざる手に導かれたかのように、そうするわけです。その見えざる手のほうが、目に見え、荒っぽくて収奪的な国

家の手よりもました、と。

こうした考え方は、爾來、弁説の中に生きつづけています。非社会主義の世界のどこかで実業家が顔を合わせれば、きっと私利追求への賛辞が、いまではたいい洗練された言いまわしに変わっています。きつと声高に語られるのです。

### ピンと分業

私利の追求とともに、国民の富は分業によっても高められました。この分業——おおまかに言つて専門化によるすぐれた効率——を、スミスはこのほか重視しました。効率は、一面において事業系列の特化によって、また一面においては職業の専門化によって高められました。また、国によってはもっぱら特殊な産物を生みだしたり、交易活動を特化したりすることにより、また製造工程の内部を特化することによつても効率は高められました。「労働の生産力における最大の改善と、労働をどの方向にふり向け、あるいは使うにしても、その熟練と技能と判断の大部分は、分業の結果であつたと思われる」

以下に、スミスが分業をどのように描いたかを示す最も有名な例をあげましょう。情報を求めている途中で、彼はピンをつくつていふところにつかり、いつもながら注意深くその工程を観察したのちがいりません。

一人が針金を伸ばし、次の者がそれを真っ直ぐにする。三人目がそれを切り、四人目がとがらせ、五人目が頭部をつけるために先端を磨く。頭部をつくるのにも、二つか三つの別の作業が必要である。頭部をとりつけるのは特別な仕事であり、ピンを白く光らせるのも別の仕事である。さらに、ピンを紙に包むことも、それ自体が一つの仕事なのである……。

スミスの計算によると、一〇人が仕事を分担して働けば一日に四万八〇〇〇本のピンをつくることができました。つまり、一人当たり四八〇〇本です。一人でこの作業の全部をやつたら、一本かもしれないし、二〇本かもしれないでしょう。ところが、いまだに、その実施とともに労働生産性を高めた流れ作業は今世紀初頭におけるヘンリー・フォードの発明だと広く信じられています。

市場が大きくなれば、ピンでもほかの製品でも、それだけ生産量が多くなり、分業の機会も増えます。このことから、スミスは関税と交易にかかわるその他の制約に反対し、できるだけ広範な市場をつくつて国内的にも国際的にも物資の交流に最大限の自由を与えよ、と主張しました。

交易の自由は、ひるがえつて、自分の利益を追求する個人の自由を拡大しました。その活動範囲は国内だけでなく、国際的にも広がりました。交易の自由と企業の自由が結びついて、最も望まれていたものの生産がさらに高まりました。そして、最も好ましい社会的結果がもたらされたのです。

## 人の結びつきと法人企業

こうした自由になりたいする古くからの敵は、国家でした。関税をかけ、独占を認可し、税の負担を負わせ、とりわけ放置しておけばよいものに手をつけたがるおせっかいな重商主義の政府だったわけです。しかし、脅威が国家だけでなかったことは、最近になってスミスが引用するほとんどのすべての人びとが想像する通りです。ビジネスマンも、自分たち自身の自由になりたい大きな脅威でした。彼らはいつに変わりなく盲目的に自分で自分に制約を課そうとしてきたわけですが、ここからアダム・スミスのもう一つの辛辣きわまりない観察が生まれました。「同業者仲間が顔を合わせると、楽しみや気晴らしのために集まったときでさえ、会話はたいいてい社会一般にたいする陰謀とか値段を釣り上げるための方策といったところに落ちつくのである」

スミスはもう一つ重要な指摘をしています。これも現代の実業界の代弁者たちが無視しているものです。事実、それは多くの人にとっては耳を疑うような指摘なのです。スミスは、現在法人企業と呼ばれている株式会社に強く反対しました。株式会社の株主について、彼はこう書いています。「……(彼らは) 会社の業務をいくらかでも理解しているというふりすらめつたにしない。たまたま株主たちのあいだに派閥的な対立でも生じていなければ、彼らはあえて業務内容を知らうとせず、取締役が彼らに渡してもよいと思う半年分ないし一年分の配当を満足して受けとるのである」さらに、取締役にについて、スミスはこうつけ加えています。

……自分たちの金というより、むしろ他人の金の管理者であるがために、しばしば有限会社の共同経営者が自分の金に目を光らせるときのような細心の注意をはらって、彼らがその他人の金を見張るとは期待しうべくもない。さながら金満家の執事のように、彼らは、些事にかかずらうのは主人の名譽をそこなうと考えがちであり、ごくあっさりと注意を払う義務を放棄してしまふ。そんなわけで、こうした会社の業務運営には多かれ少なかれ怠慢と浪費がはびこらざるをえない……排他的な特権がなければ……(株式会社は) たいいていは貿易で不手際を演じてきた。排他的特権があれば、不手際を演じ、かつ貿易を独占してきた。

合衆国商業会議所や全国製造業者協会のこれから開かれる会合や、この両者がはじめて合同会議を開くようなとき、あるいはイギリスの産業連盟の会合に、アダム・スミスを出席させるよう取りはからえないのは、じつに残念なことです。スミスは、大企業あるいはもっと大きいコングロマリットないしカルテルの社長たちがスミスの名前を引き合いにだして自社の経済的長所を並べたてるのを耳にしたら、さぞかしびつくりすることでしょう。その反面、社長たちも、予言者中の予言者ともいべきスミスから彼らの会社など本来あつてはならないものなどと聞かされたら仰天することでしょう。

## 住民一掃

アダム・スミスは一七九〇年に死にましたが、その晩年をエディンバラの関税長官として安樂に過ごしました。この地位は、彼の非難した閑職であり、自ら反対した関税業務を扱うものでしたが、実際の人間である彼は、この場合にも断わりませんでした。彼は、エディンバラのロイヤル・マイルに近い小さな墓地に埋葬されていて、彼の住んだ家もほど遠からぬところにありますが、ときおり学者が訪れるだけで、その数もあまり多くはありません。経済学者は、概して自分たちの英雄にたいして冷淡なのです。デヴィッド・ヒュームはそこからほんの一、二マイル離れたところで、ずっと立派な記念碑によって顕彰されており、その隣には南北戦争に際して奴隸解放のために戦ったスコットランド系の兵士を記念するエイブラハム・リンカーンの像が建てられています。

スミスが死んだ頃には、彼の予言した変化はイングランドやスコットランドではつきりと目につくようになっていました。それは農村でも都市でもそうでした。産業革命は急激に起こったものではなく、それは実際に目で見て確かめられるような革命だったのです。

いたるところで、人びとは田舎の村から都市に引き寄せられ、工場で働くようになりました。スコットランドでも、住民が不意に田舎から追われるように出ていきましたが、それは羊毛という主要な産業の原料にたいする需要が高まった結果でした。

こうした住民追いだしの最も目ざましい例は、サザーランドで見られました。スコットランドの最北端に位置するこの地方は、起伏に富んだ高地がはてしなくつづき、広さの点でも高さの点でも、スコットランドの全陸地のかなり多くの部分を占めています。夏には、緑におおわれた人気がない美しい土地に、極北のやわらかい日差しが降りそそぎます。一九七五年の夏にこの地を訪れて、私は故リチャード・クロスマンの言葉を思い出したものです。「アメリカ人で、イギリスがどれほど広大な空間に恵まれているかを本当に知る者はいない」前世紀の初頭には、この広大な土地のざつと三分の二を、サザーランド伯爵夫人とその夫であるスタッフォード侯が所有していました。

一八一一年から一八二〇年のあいだに、彼らは一万五〇〇〇人の高地住民をその領地から追いついて羊を飼う土地を確保したと、一般に推定されています。ネイヴァー川は幅の狭い黒く濁った水の流れる川ですが、この地方をざつと三〇マイルから四〇マイル北に流れて、スキヤバ・フローからほぼ五〇マイル西のペントランド・ファースの近くで海に注いでいます。この川をはさんだ狭い地味のやせた流域には、当時、大勢の人びとが住んでいましたが、そのほとんどが立ち退かされたのです。

一八一四年五月に、ストラスネイヴァーでは（他のどこでもそうでしたが）、この住民追放の動きは、ナチによるユダヤ人追放のような有無を言わさぬものとなりました。三月に、小作人たちは二カ月後に立ち退くよう通告されました。それでも、人びとはぐずぐずしていました。ほかに行き場所がなかったのです。そこで、地主の手先が松明をもち犬をつれてのりこんできまし